

琉球の火打石・火打金について
－考古・民俗資料の紹介－

藤木 聡 大堀 皓平 山崎 真治

Flint stones and strikers of the Ryukyu Islands:
A brief report of archaeological and folklore materials.

Satoshi FUJIKI, Kohei O'HORI, Shinji YAMASAKI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第18号別刷

2025年3月14日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.18
March, 2025

琉球の火打石・火打金について — 考古・民俗資料の紹介 —

藤木 聡¹⁾ 大堀 皓平²⁾ 山崎 真治³⁾

Flint stones and strikers of the Ryukyu Islands:
A brief report of archaeological and folklore materials.

Satoshi FUJIKI¹⁾, Kohei O'HORI²⁾, Shinji YAMASAKI³⁾

1 はじめに

火は、人の暮らしに欠かせないものであり、火起こしの技術とそれを支える物質文化を明らかにすることは、人と火の歴史を知るうえで重要である。世界史的に見て、発火具や発火法の種類には大別して2つの発火法、すなわち打撃式発火法と摩擦式発火法が知られており、前者の代表例として火打石・火打金を打ち合わせて発火する方法、後者の代表例として火鑽臼・火鑽杵を擦り合わせる方法がある。

では、沖縄県域における火起こしの技術や物質文化の歴史はどうであったか。考古資料からこれを探ると、沖縄県域の遺跡出土摩擦式発火具の初例となる渡地村跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2007）出土の火鑽臼は、報告書では15世紀後半頃のものと推定されている。一方、打撃式発火法による火打石・火打金については、その可能性の考えられる資料がいくつか報告されてきた（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001・2015・2016・2017ほか）。

このうち、火打石の可能性が考えられた資料について、筆者らは楔形石器・石核あるいは火打石の可能性を踏まえて検討を進めており、個別石器の技術形態や使用痕等の観察はもちろんであるが、先史時代から近代までの石器器種・石材利用の通史的な視点等も加味して議論する必要があると考えている。

このような現状の中、筆者らは遺跡出土資料中から火打石と判断できるものを確認した。上述のような調査研究の現状を踏まえるときわめて重要な成果と考えられるので、本稿で速報的に紹介するものである。また、沖縄県立博物館・美術館所蔵の民俗資料中に見られる火打石・火打金等は、沖縄県域の考古資料の不足点を実資料でもって補うことができる点で重要であり、合わせて紹介する。加えて、沖縄県域における発火具に関する聞き取り記録等についてもその概要を収録し、今後の資料解釈等の一助としたい。

なお、本文は、2（1）を大堀、3（1）を山崎、2（2）・3（2）を藤木が分担し、1・4は山崎・大堀と確認しつつ藤木が作成した。

2 喜友名前原第三遺跡の火打石

（1）遺跡出土火打石の探索と出土遺跡の概要

筆者らが火打石と判断した資料は、喜友名前原第三遺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター 2023）から出土した石英1点である。同遺跡は、宜野湾市の普天間飛行場内において、平成11・12年度の試掘調査によって発見された（図1右上・同中段）。その後の平成26年度に確認調査が行われ、火打石が出土したトレンチ5からはグスク時代のピット群や近

¹⁾ 宮崎県埋蔵文化財センター 〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019
Miyazaki Prefecture Archaeological Center, 4019, Shimonaka, Sadowara, Miyazaki, Miyazaki 880-0212, Japan

²⁾ 沖縄県立埋蔵文化財センター 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原193-7
Archaeological Center of Okinawa Prefecture 193-7, Uehara, Nishihara town, Nakagami county, Okinawa 903-0125, Japan

³⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

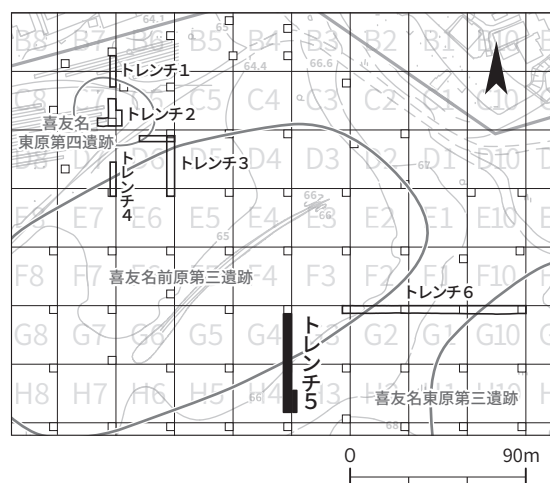
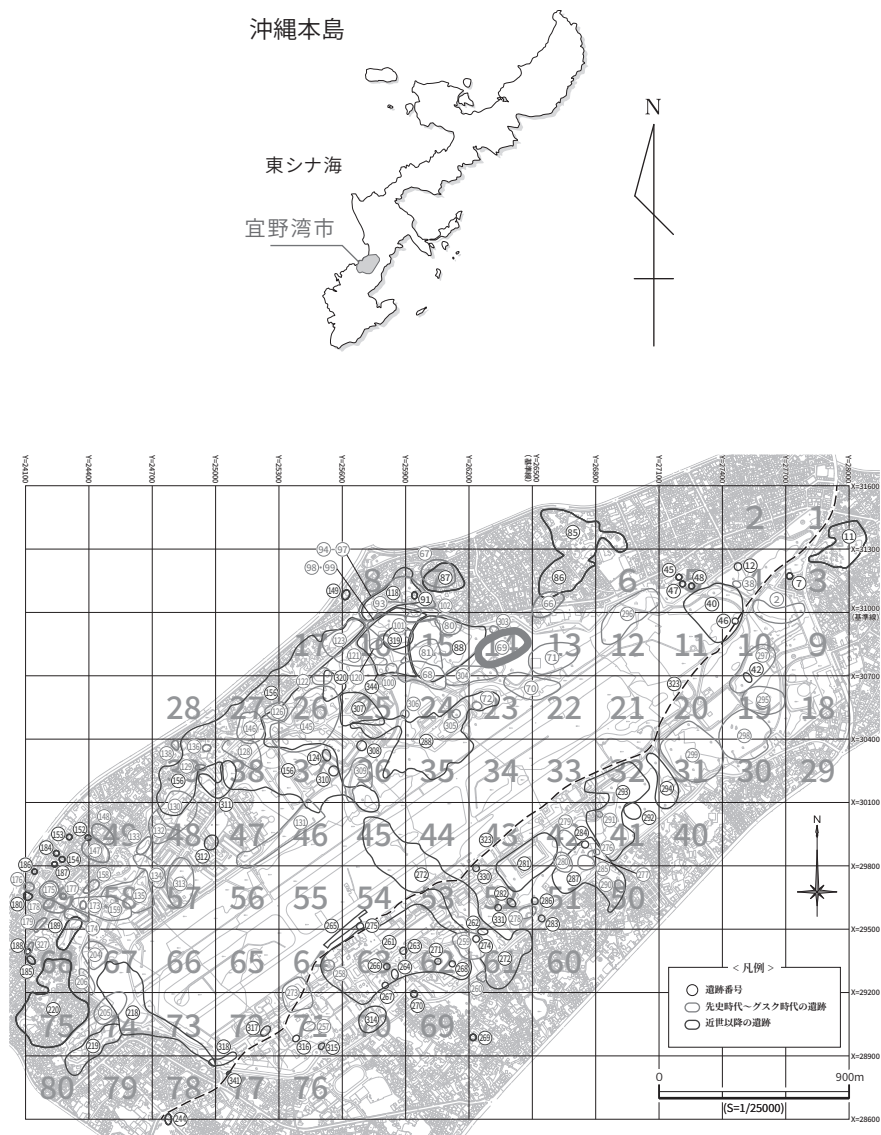
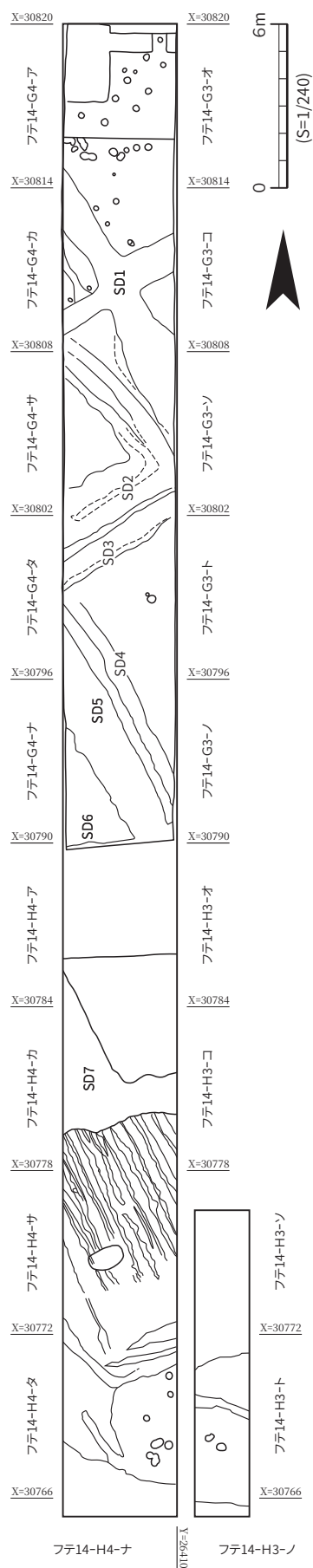


図1 喜友名前原第三遺跡トレンチ5の位置及び検出遺構平面図

世・近代の区画溝（SD1～SD7）と畝で構成される畑跡、さらにトレンチ南端には竪穴建物の可能性のある土坑が検出されている（図1左、同右下段）。この遺跡のすぐ北にある喜友名東原第四遺跡からは縄文時代晩期の竪穴建物跡が検出されており、覆土中から黒曜石製の石核や剥片などが出土している。普天間飛行場東部側の台地上には縄文時代後期後半から晩期の竪穴建物跡を検出する遺跡が点在しており（図1右中段）、喜友名前原第三遺跡や喜友名東原第四遺跡もこれに含まれる。

他方、沖縄島中南部では先史遺物を含まない近世・近代の遺跡からもチャートや石英製の石器が見つかることがある。チャートや石英を産する地層の分布は沖縄島北部や周辺離島に限られるため、これらの石器やその石材は人為的な持ち込みと考えられる。このような出土状況から、執筆者の一人である大堀は先史時代の石器が混入したのではなく、出土層と同時代の石製品として形状や使用痕跡から火打石の可能性を考慮し、実際にそのような可能性のある石製品を報告してきた（沖縄県立埋蔵文化財センター2015・2016・2017）。

今回、火打石として報告する資料は、表土出土であるため明確な帰属年代は不明とせざるを得ないが、遺跡近隣では産出しない石英で同石材のツールは認められないこと、さらに石核でいうところの打面に独特の小剥離痕や潰れが認められることから、資料整理作業において出土品一つ一つに付ける遺物観察カードに「火打石の可能性あり」とのメモを記した。その後、報告書作成の前に担当者が交代したこともあって集計表に記載されるのみとなったが、上記のカードは廃棄されることなく残され、これを執筆者の一人である藤木が確認の上、山崎を含めて三者で再検討した結果、火打石と判断するに至った。

なお、火打金とみられる鉄製品の出土例は、その可能性のあるものとして伊佐前原第一遺跡の9層（地山層）で報告例がある（沖縄県立埋蔵文化財センター2001）が、全形不明な欠損品ということもあって、報告でも「刀子などの刃物類か火打金の可能性が考えられる」と併記されたとおり、明確でない。他の製品を含めて、金属製品の分析検討は沖縄県内における今後の大きな課題と認識している。

（2）火打石の観察所見

観察所見の前に、そもそも火打石とはどのような石器として遺跡から出土するのか確認しておこう。

火打石は、火打石として使用された痕跡である、稜線上の潰れや摩滅あるいは小さな剥離等が残されたものである。使用によって割れや欠け・潰れ等が生じることで形状の変化を繰り返すものであり、使用過程でいかようにも形状変化するが故に型式的な特徴が明確でない。あくまで使用された結果の姿、その使用が止まった時点での形状で遺跡から出土している。

したがって、火打石の形状には、多面体となった石塊や石片等様々であり、その大きさは、片手で保持しうる程度から、使い込まれた結果で爪先ほどのサイズまで小さくなったものもある。使用された痕跡には稜線の全てに痕跡が残されているものから少しの使用のみで部分的な使用痕跡にとどまっているものまでみられ、使い込まれ方の程度によって様々である。また、火打金＝鉄と打ち付けることから、火打石の表面に鉄錆が付着している場合がある。冒頭でも述べたとおり、先史時代の楔形石器・石核等と見分けが難しい場合もある。石材には、セットで用いられる火打金（鉄）を打ち削ることが可能な硬さと割った時の稜線の鋭さが必要であり、石英やチャート・メノウ・玉髄等が多く用いられる。

図2は喜友名東原第三遺跡出土の火打石である。石材は、転磨された円礫状態となった、良質かつ白色でやや透光性ある石英である。円礫面から打ち割られ、上面から裏面にはやや広く礫面が残っている。この礫面と打ち割りによる剥離面がなす稜線のうち、実測図の正面・上面境の稜線、右面・上面境の稜線上を中心に顕著な潰れがある。剥離面は、同時割れしている可能性もある。正面の稜線上にはわずかではあるが鉄錆の付着する箇所がある。法量3.2×2.5×2.2cm・重量20.9gである。

円礫面を持つことから、火打石の原石について、岩脈等から割り出すような採掘ではなく、露出した礫層あるいは河原・海岸等から採取されたものとわかる。また、火打石と判断した根拠としては、稜線上の顕著な潰れが最も重要である。部分的ながら器面にみられた鉄錆の付着は、火打金との打ち付けによる可能性がある。石英という石材、そして片手で

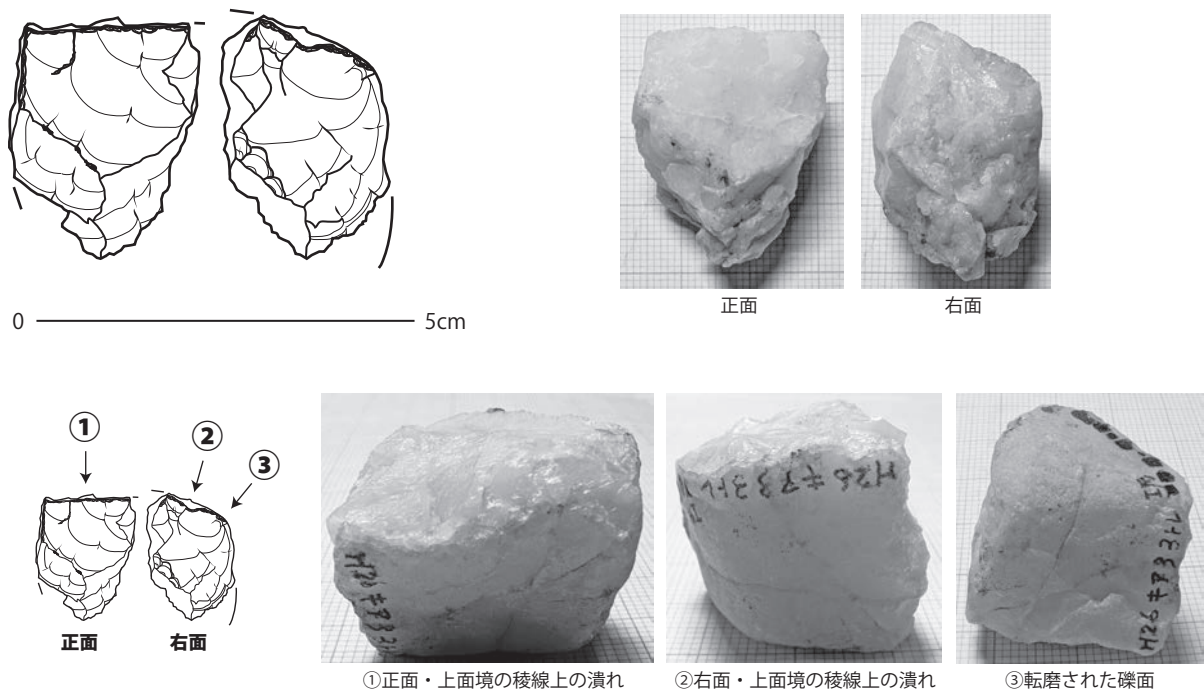


図2 喜友名前原第三遺跡出土の火打石

保持しうるサイズであることも火打石と認定するポイントとなっている。

3 民俗資料としての火打石・火打金

(1) 沖縄県立博物館所蔵の火打石・火打金の紹介

沖縄県立博物館・美術館には、民俗資料として上江洲均氏によって収集された火打石を含む火打道具一式が収蔵されている。本資料の他に、琉球（奄美・沖縄）の民俗資料として現存する火打具には、国立民族学博物館（奄美大島・薩摩硫黄島）や奄美博物館（奄美大島）、鹿児島県歴史・美術センター黎明館（宝島）の収蔵品があり、与路島の個人所蔵資料についても報告がある（藤木2025）。

図3に沖縄県立博物館・美術館収蔵資料（台帳番号4779（仮番号1057））の火打道具一式の写真を示す。これらは1977年に徳之島町花徳の個人から当館に寄贈されたもので、巾着袋、竹筒（煙草入れ）、火打石、火打金からなり、竹筒（煙草入れ）には刻み煙草が収納された状態である。

火打金は鉄製で、長さ77.3mm、幅31.1mm、厚さ5.4mm、重さ48.9g。側面は使用による磨り減りが顕著である。火打石はスリガラス状のやや透明感のある緑色～褐色チャート製で、長さ30.2mm、幅

33.1mm、厚さ14.4mm、重さ15.5gである。一面に原石面（円礫面）を大きく残す厚手の剥片を素材としており、全体に薄くタール状の付着物が見られ、やや摩滅している。側縁稜線の潰れが顕著であり、縁辺の所々に新鮮な割れ口と潰れ痕が認められ、いわゆる二重パティナの状態になっている。

このほか、火打金との接触によって生じたと思われる鉄錆状の線状痕も認められた。チャートの石質は、徳之島の礫層中から産するチャート（山崎2023）と考えて矛盾ないものと思われ、原石面の状況から、拳大程度の円礫から割りとられた石片を利用しているようである。

(2) 火打石等に関する聞き取り情報等について

聞き取り個別の詳細は、表1に一覧したとおりであり、本稿の関心からは、さしあたり次の諸点が注目される。

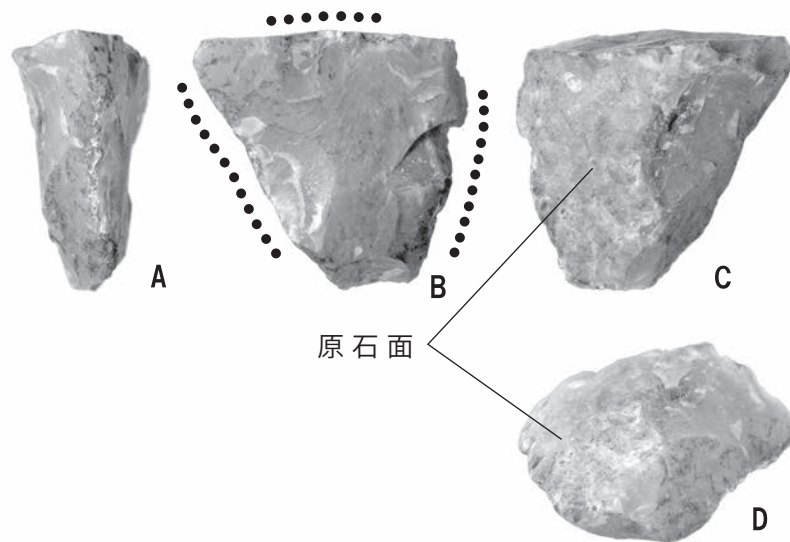
沖縄県域における発火具の状況を述べたのは、管見では、若林勝邦が各地の摩擦式発火具を紹介する中で西表島の事例を紹介（若林1888）したのが最初である（図4、参考となる複製品として図5）。若林によると、「近来日本ヨリ燧石火打鎌ノ輸入ニヨリ」、今は猟師や樵者が山に行く際に摩擦式発火



火打道具一式



火打金



火打石（チャート）：B が主要剥離面（●●●●は稜線の顕著な潰れ）

図3 沖縄県立博物館・美術館所蔵の火打石と火打道具一式

表 1 沖縄県域の発火具に関する聞き取り等の一覧表

地点等	出典	内容
沖縄市知花	沖縄市教育委員会2007	「火打ちガコというのは、火を起こす道具のことだよ。それは銅鉄でできていたそうだ。火石と火打ちガコとこう打って煙草に火をつけたらそうだ。火石というのはその川に沢山あったが、もう、今行くといろんなもので覆いかぶさってわかりにくいかもしれない。この火石というのは、少し赤色がかかっていてね、ガラスのようなものもあったよ。それを二つこつ打つとね、今時分、牛小屋のような暗い所でも、火が出るのがわかるよ。たとえ昼であっても、暗いところではわかる。」(※火石は火打石のこと) 話者：島袋次郎(1901年生)。
沖縄市知花	上江洲1973b・崎原1985	鳥島の硫黄を粉末にして、枯葉にふりかけ火打石で点火した。竹筒(竹ブーリー)に孔をあけ、それに竹炭のような柔らかい灰を入れ、火石と鉄を打って出た火花を煙管のタバコに点火し、タバコに火が付くとそれを竹筒の灰に落としておき、枯葉などに移して火種とした。
名護市日間	琉球大学民俗研究クラブ 1967	マッチが発売されていなかった頃の火種は、火石に火打金を当てて発火させた。これは専ら男の仕事であり、火がつくと、朽ちた木に火を移す。火種の保存・保存した火が消えてしまった時の話あり。
うるま市与那城	琉球大学民俗研究クラブ 1969	昔は火石小(小に対しグワーとルビ)といって火打石で火を起こした。畑で火を起こす時は、堅木を二つ擦り合わせ、煙が出てきたら芥をくつつけ、火を付けたという。
糸満市	沖縄県教育委員会文化課 1974	糸満の漁師のきざみ煙草入れ(カタツパーフソウ)の蓋の裏には火打石(後にはマッチ)を入れるところを設けているとある。
国頭郡東村川田	琉球大学民俗研究クラブ 1963	マッチがなかった以前には、火打石で火を起こして、クチヤ木の枯れたのを入れたダキブーリーと称する竹筒に点火させた。火打石は川や浜辺から拾ってきた白い石で、それと鉄片とを摩擦することで火を起こした。火の保存法に関する話あり。
国頭郡東村	東村1987	東村の小地名を地図中に範囲を示しつつ挙げている。“ヒーフィバンタ”に火打石があったという。
津堅島	琉球大学民俗研究クラブ 1961	摩擦による火起こしが60〜70年前(調査は1961年5月20〜22日に実施されたことから1890〜1900年頃か)まであった。アフアと呼ばれる台木に数ヶ所穴をあけ、ヒヌク木と呼ばれる木の棒を押し込み、左右に回転させて摩擦を生じせしめ、火を起こす。この道具をヒヌクという。
伊平屋島 島尻	上江洲1978・1986	火起こし道具は、川や浜辺で拾った白い石と銅鉄で、普段は竹筒に入れて持った。銅鉄の大きさは1寸に3寸位の大きさ。山からクチ木を持ってきて、粉にして竹筒に入れ、左手に煙管を詰めて持ち、同時に石も持つ。右手には銅鉄を持って、強く打ってまずタバコに火を付け、それを竹筒のクチ木に点火する。さらに火打ちの良い木に点火して、火種を暖かい灰に埋めて保存した。話者：中川蒲(1971年当時80歳)・同妻モウシ(1971年当時73歳)。
伊平屋島	新垣・諸見1956	上江洲1978・1986と同様の発火具セットや火の保管方法が書かれている。火打石等による方法は、マッチの輸入によって自然に使用しなくなったという。
伊平屋島・伊是名島	仲田1974	戦時中にはマッチがなく「古老から習って、火打石で火種を作って」いたという。
座間味島ほか	座間味村史編集委員会 編 1989	座間味村では、火打石は用いられなかった。サーター木(ネズミモチ)をこすり合わせて火を起こし、その火種を長時間大切に保存するために、ズスギの木やシュロ縄を利用した。
宮古島 平良狩保	琉球政府文化財保護委員会 1969	トパス(松の脂)木を火種として用い、火起こし用具(ウマツウクスムノ)があった。同用具は、宮古図書館民俗資料として現存する。話者：狩保吉蔵(調査当時86歳)。
多良間島 仲筋・塩川、水納島	琉球政府文化財保護委員会 1969	マッチのない時代の火起こし具はピデイリと呼ばれ、畑仕事の際に使われた。所有者は仲宗根春見。話者：徳嶺春規(調査当時80歳)。
竹富島	上江洲ほか1983	竹富島の資料館で復元火切り具。台木はピーウス(火臼)、杵をビーイナイキ(火杵)という。ピーウスは9×21×4.5cmのデゴの板。3つの窪みを彫り、側面に溝を付ける。そこへ点火しやすいものを差しておき、杵を摩擦して点火した。ビーイナイキは全長35cm。竹の先にデゴを付けている。岩崎卓爾『ひるぎの一葉』の中に「樹ト幹ヲ六、七寸ノ長サニ伐リ、摩擦シ、火焰ヲ燃ヤシタリト、遺風尚ホ存ス」とあるのはまさしくこれ。火杵は一段と進んだものも用いられ、八重山でいくつも見ることができた。
西表島	若林1888	植物学者の田代安定の採集品が報告されている。「佐和藤(サガリバナ)」が用いられる。杵も木で竹を割って挟む。杵を臼の上に立て錐もみすると小穴を得ることができ、粉が生じて粉が溝に落ちて火が生じるもので、3〜4分で火を得ることができる。以前は西表島で一般に広く用いられていたが、「近來日本ヨリ燧石火打鎌ノ輸入ニヨリ、今は猟師や樵者が山に行く際に用いるばかりとなっている。
与那国島 祖納	上江洲ほか1983	下の木の輪の重みと上に張った縄で反動をつけて回転させるもので、船大工用錐のクルマイリと同原理である。
八重山	上江洲ほか1983	沖縄本島では火打石と銅鉄。八重山では、ピーウスというデゴの台木に窪みを作り、その側面に溝を付けて側面の溝に点火しやすいものをさしておき、窪みに竹の先にデゴの木を差し込んだビーイナイキと呼ぶ火杵を立てて摩擦して火起こし。火杵は、後に、コマに縦棒をととしてその上先部から左右に紐を張り、縦棒に通した横棒を吊るしたクルマキリと同形のものも使われた。火切り具は今、探し出すの難しく、話を聞くだけの過去の民具。

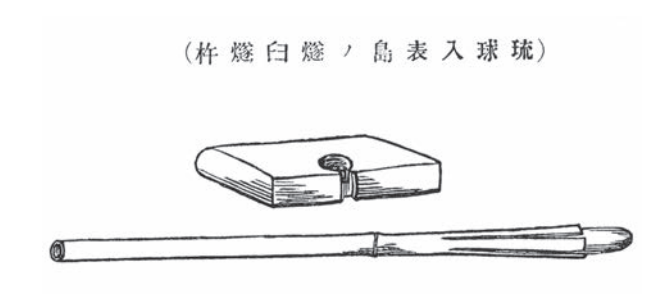


図 4 西表島の摩擦式発火具 (若林1888から転載)



図 5 摩擦式発火具の複製 (沖縄県立博物館・美術館常設展)

具を用いるばかりとなったというが、1888（明治21）年の「近來」に火打石・火打金を用いる打撃式発火具とその技術が「日本」から持ち込まれた点、旧来の摩擦式発火法が一気に消失するのではなく獵師等の山行きの際には残っている点は、西表島における火打石・火打金等を用いた打撃式発火法の登場契機や新旧発火法の過渡期的様相を示しており、興味深い報告となっている。摩擦式発火法は、1909（明治42）年出版の『石垣島案内記』等が元本となっている『ひるぎの一葉』（岩崎1920）でも「遺風尚ホ存ス」として紹介され、1909年の石垣島において摩擦式発火法が継続していたとわかる。

1960～1970年代には、上江洲均氏や琉球大学民俗研究クラブ・琉球政府文化財保護委員会等により、1890～1900年頃の生まれで当時70～80歳代の話者から聞き取りがある。このうち、伊平屋島島尻では、火打石に「川や浜辺で拾った白い石」を用い、火打金が「1寸に3寸位の大きさ」の鋼鉄であったという（上江洲1978）。近年では、火打石の材料となる石材が沖縄市知花地区の川に沢山あったこと、その中には少し赤色がかっていてガラスのようなものもあったことが聞き取られている（沖縄市教育委員会2007）。この他、国頭郡東村平良では“ヒーフキバンタ”と呼ばれる土地に火打石があったという（東村1987）。これらは、断片的ながらも、火打石の産地や石材の特徴、火打石の入手方法等がわかる点で注目される。

各地の聞き取り成果の全体を通しては、沖縄本島では火打石・火打金による発火法、八重山周辺では摩擦式発火法が近年まで残るとされる（上江洲ほか1983）。そして、火打石等を用いた発火法がマッチ登場とともに失われていく様子や、戦時中にはマッチがなく古老から火打石による発火法を習うという一時的な復権のあったことがわかる点も、人と火の歴史として興味深い聞き取りとなっている。

4 おわりに

本稿では、これまでほとんど実態のわかっていない沖縄県域における火打石・火打金の歴史等へのアプローチとして、①これまでの沖縄県域における関係調査研究をふりかえり、②喜友名前原第三遺跡から出土した火打石の実測図や観察所見等を速報し、

③徳之島で収集された火打石を含む火打道具一式の民具資料の詳細を報告し、④沖縄県域における発火具等に関する聞き取り情報を収集し、考古資料等を解釈する上での参考とした。

琉球における火と人の関係史は、例えば打撃式発火法がいつどのような経緯で登場するのか等、まだわかっていないことの方が多い。その解像度を上げていくには、既存の資料の再検討や今後の新たな発掘調査が重要となってくる。本稿が契機となって、沖縄県域における遺跡出土の火打石・火打金への関心が高まることに期待したい。

本稿をまとめるにあたり大城沙織、大湾ゆかり、国吉新織、金城 翼、（故）上江洲 均の皆様にはさまざまな形で御協力・御教示を賜りました。心より御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 新垣平八・諸見清吉 1956『伊平屋村誌』伊平屋村役所
岩崎卓爾 1920『ひるぎの一葉』濱崎壯一発行
上江洲 均 1973a「火切り具」『沖縄の民具』慶友社
上江洲 均 1973b「知花民俗小記」『やちむん』第4号、那覇市歴史博物館
上江洲 均 1978「伊平屋島採訪記—島尻村落の民俗調査から—」『沖縄県立博物館紀要』第4号
上江洲 均 1986『伊平屋島民俗散歩』ひるぎ社
上江洲 均・神崎宣武・工藤員功 1983『琉球諸島の民具』未来社
大堀皓平 2006「先史沖縄人の在地性—縄文時代後晩期から弥生時代中期併行段階における石器石材—」『南島考古』第25号、沖縄考古学会
大堀皓平 2014「琉球列島の石器・石器石材」『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』六一書房
大堀皓平 2020「沖縄・奄美諸島の先史時代における石器石材獲得消費戦略」『遺跡学研究の地平—吉留秀敏氏追悼論文集—』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
沖縄県教育委員会文化課 1974『糸満の民俗 糸満漁業民俗資料緊急調査』沖縄県文化財調査報告書

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『伊佐前原第一遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『基地内文化財7』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第76集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『首里城跡ー正殿地区発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第82集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『東村跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第92集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2023『基地内文化財10ー確認調査報告書ー喜友名東原第四遺跡 喜友名前原第三遺跡 喜友名東原第三遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第115集
- 沖縄市教育委員会 2007『沖縄市の伝承をたずねて 中北部編』沖縄市文化財調査報告書第32集
- 加藤祐三 1985『奄美・沖縄 岩石・鉱物図鑑』新星出版
- 崎原恒新 1985「沖縄県の火の民俗」『九州・沖縄地方の火の民俗』明玄書房
- 座間味村史編集委員会 編 1989『座間味村史』中巻、教育文化・社会・民俗
- 聖教新聞社沖縄支局 編 1972『沖縄の民具ー手づくりの美ー』
- 仲宗根政善 1983『沖縄今帰仁方言辞典 今帰仁方言の研究・語彙篇』角川書店
- 仲田清英 1974『伊平屋列島文化誌』
- 東村 1987『東村史』第1巻、通史編
- 藤木 聡 2025『火打石・火打金の文化史ー考古学からみた火起こしの研究ー』吉川弘文館
- 山崎真治 2013「沖縄・先島諸島の石器石材の流通とその評価」『月刊考古学ジャーナル』638、ニュー・サイエンス社
- 山崎真治 2020「沖縄先史時代の剥片石器技術とその特質」『遺跡学研究の地平ー吉留秀敏氏追悼論文集ー』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
- 山崎真治 2023「琉球列島の剥片石器石材産地とその利用について」『九州旧石器』第27号、橘昌信先生追悼論文集、九州旧石器文化研究会
- 琉球政府文化財保護委員会 1969「平良市 狩俣」『沖縄の民俗資料』第1集（大島暁雄1996『九州・沖縄の民俗 沖縄編』三一書房に載録）
- 琉球大学民俗研究クラブ 1961「津堅島民俗調査報告」『民俗』第3号
- 琉球大学民俗研究クラブ 1963「川田部落調査報告書（東村）」『沖縄民俗』第7号
- 琉球大学民俗研究クラブ 1967「久志村汀間部落調査」『沖縄民俗』第13号
- 琉球大学民俗研究クラブ 1969「宮城部落調査（中泊郡与那城村）」『沖縄民俗』第17号（大島暁雄1996『九州・沖縄の民俗 沖縄編』三一書房に載録）
- 若林勝邦 1888「燧白及燧杵」『東洋學藝雜誌』第87號